

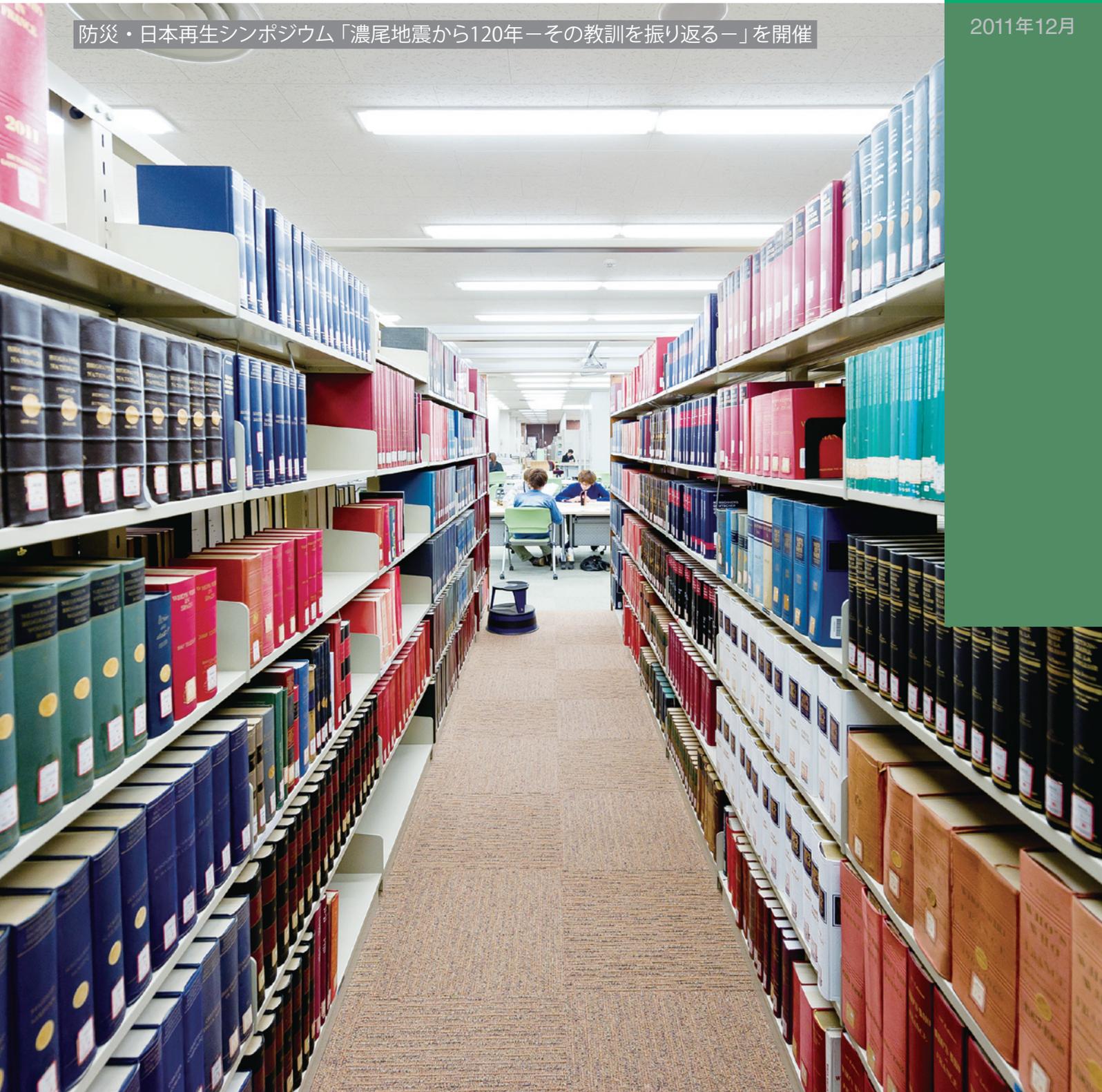
名大トピックス

NAGOYA UNIVERSITY TOPICS

No.223

2011年12月

防災・日本再生シンポジウム「濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」を開催



目次

●ニュース

防災・日本再生シンポジウム「濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」を開催	3
平成23年秋の叙勲受章者決まる	4
平成23年度大学の世界展開力強化事業に採択される	4
あいちサイエンスフェスティバル2011を開催	5
第34回経営協議会を開催	6
あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムシンポジウムを開催	6
日本・ウズベキスタン学長会議を開催	7
平成23年度秋季新入留学生歓迎懇談会を開催	7
平成23年度日本数学コンクール表彰式を挙行	8
第7回高等研究院レクチャーを開催	8
第73回防災アカデミーを開催	9

●知の先端

神経変性疾患に対する革新的治療法開発 錫村 明生（環境医学研究所教授）	10
--	----

●知の未来へ

偏りのある情報を補正するための統計科学：マーケティング意思決定への活用 星野 崇宏（大学院経済学研究科准教授）	12
--	----

●部局ニュース

2008年ノーベル物理学賞受賞記念植樹式を挙行	13
坂田昌一博士生誕100周年記念碑の除幕式を挙行	13
第26回国際学術シンポジウムを開催	14
材料バックキャストテクノロジーシンポジウムを開催	14
第15回ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーシンポジウムを開催	15
第13回「まちとすまいの集い」を開催	15
世界化学年2011特別展示「祖国から見たマリー・キュリー」を開催	16
ICCAE 2011年度第6回オープンセミナーを開催	16
第4回2011高校生向けセミナーを開催	17
2011年秋季特別展を開催	17
第3回地球教室を開催	18
ミクロの探検隊を開催	18
和式馬術供覧を開催	18

●本学関係の新聞記事掲載一覧 平成23年10月16日～11月15日

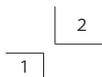
●イベントカレンダー

●ちょっと名大史

第10代総長 加藤延夫 — 名大をひきいた人びと⑩ —	28
-----------------------------	----

「防災・日本再生シンポジウム 濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」を開催





- 1 あいさつをする総長
- 2 パネルディスカッションの様子

防災・日本再生シンポジウム「濃尾地震から120年－その教訓を振り返る－」が、10月28日（金）、豊田講堂において開催されました。

山岡耕春環境学研究科教授の司会のもと、まず、濱口総長が開会のあいさつを行い、産業の中心である東海地方の地震対策の必要性について話しました。

シンポジウム前半は、4名の講演者による基調講演が行われました。最初に、伊藤和明元NHK解説委員が「濃尾地震の災害伝承の意義」と題して、濃尾地震の時の山地災害及び近年の内陸地震による土砂災害の状況について説明し、ダム湖で起こる津波被害に対する注意を喚起するとともに、情報伝達及び避難の体制を整備する重要性を訴えました。次に、岡田篤正立命館大学教授が「濃尾地震と活断層・地震研究」と題し、濃尾地震を起こした根尾谷断層等とその周辺にある断層の活動について講演しました。続いて、西澤泰彦環境学研究科准教授が「濃尾地震の建築被害とその影響」と題し

て、濃尾地震で被災した建築物を例に挙げ、その後の建築物への影響を説明し、地震で倒れなかった建築物に着目することや災害に対して官学一体で対応することの大切さを主張しました。最後に、武村雅之株式会社小堀鐸二研究所副所長が「濃尾地震と関東大震災」と題し、濃尾地震後の耐震政策と、その約30年後に起きた関東大震災後の更なる対策・政策、そして現在に至るまでの根気強く着実な耐震化政策が実を結んでいると話しました。

後半は、「濃尾地震の教訓を地震活動期の今にどう活かすか？」をテーマにパネルディスカッションが行われました。福和伸夫環境学研究科教授をコーディネータとして、平原和朗京都大学教授、鈴木康弘環境学研究科教授、堀宗朗東京大学教授、本学客員教授である隈本邦彦江戸川大学教授、栗田暢之NPO法人レスキューストックヤード代表理事の5名が、それぞれ地震学・活断層・土木系工学の研究者、メディア関係者、市民の立場から、テーマに沿って意見を述べました。各

パネリストは、陸・海を震源とする連動地震とその発生の偶然・必然性、「震裂波動線」と活断層の地震発生率の関係、理学・工学の枠を越えた断層形成の解明、正確な計算結果を出すための精度の高い入力データの追求、大規模な地震を想定した耐震対策の必要性、各々の地域での災害史知識と伝承の重要性などの話題を提供しました。

また、濃尾地震後に震災予防調査会が作成した事業計画の内容に触れ、既に120年前にすべきことが全て書き上げてあることを評価し、各パネリストが今後の課題として、国がすべきことと地域がすべきことのすみ分け、産官学民の協力、多面的人材育成、より高い耐震補強の周知、過去から学ぶことの大切さを挙げました。最後に、日本活断層学会長である島崎邦彦東京大学名誉教授が閉会のあいさつをしました。

当日は、400名を超える参加があり、濃尾地震を振り返るとともに防災・減災を考える良い機会となりました。

平成23年秋の叙勲受章者決まる

－本学関係者8名が喜びの受章－

平成23年秋の叙勲の受章者が発表され、本学関係者では次の方々を受章されました。

[教育研究功労 関係]

瑞宝重光章

杉浦 昌弘 名誉教授（遺）
文化功労者

瑞宝中綬章

伊藤 憲昭 名誉教授（理）
元大阪工業大学特任教授

植下 協 名誉教授（工）

元中部大学大学院工学研究科長・教授・
客員教授

沖 猛雄 名誉教授（工）

元高温エネルギー変換研究センター長

島田 静雄 名誉教授（工）

保原 充 名誉教授（工）

元愛知工業大学教授

[保健衛生・看護功労 関係]

瑞宝単光章

鈴木三栄子 元医学部附属病院看護部副看護部長

[学校業務功労 関係]

瑞宝単光章

島立 清志 元財務部経理・資産管理課調理師
(高原気候医学研究所蓼科宿泊施設)

平成23年度大学の世界展開力強化事業に採択される

平成23年度大学の世界展開力強化事業が選定され、本学から3件が採択されました。

同事業は、アジア、米国等との高等教育ネットワークの構築を図ることにより、我が国の大学の世界展開力を強化し、グローバルな社会で活躍できる人材を育成するため国際的な枠組みでの高等教育の質の保証を図りながら、外国人学生の戦略的受け入れ、日本人学生と日中韓・米国等の外国人学生との協働教育による交流を行う事業に対して重点的に財政支援することを目的とするものです。

事業は、タイプA「キャンパス・アジア中核拠点形成支援」とタイプB「米国大学等との協働教育の創成支援」の2種類あり、前者は、A-I「日中韓の3カ国における大学間で1つのコンソーシアムを形成し、単位の相互認定や成績管理、学位授与等を統一的に行う交流プログラムを実施する事業（CAMPUS Asiaパイロット事業）」とA-II「中国、韓国又は東南アジア諸国連合の国々における大学との単位の相互認定や成績管理、学位授与等を統一的に行う交流プログラムを実施する事業」に、後者は、B-I「米国における大学等との協働教育を行う交流プログラムを実施する事業」とB-II「米国以外の欧州、豪州等における大

学等との協働教育を行う交流プログラムを実施する事業」にそれぞれ分かれています。

申請は、全体で183件（91校）あり、採択されたのは、25件（19校）でした。（採択率13.7パーセント）

本学が採択された事業は以下のとおりです。

タイプA-I（採択件数10／申請件数51）

プログラム名：東アジア「ユス・コムーネ」（共通法）

形成にむけた法的・政治的認識共同体の人材育成

相手大学：中国人民大学（中国）、清華大学（中国）、
上海交通大学（中国）、成均館大学校（韓国）、
ソウル大学校（韓国）

プログラム名：持続的社会に貢献する化学・材料分野の
アジア先端協働教育拠点の形成（東北大学と共同）

相手大学：南京大学（中国）、上海交通大学（中国）、
ソウル大学校（韓国）、浦項工科大学校（韓国）

タイプB-I（採択件数7／申請件数49）

プログラム名：修士課程国際共同大学院の創成を目指す
先駆的日米協働教育プログラム

相手大学：カリフォルニア大学ロサンゼルス校（米国）、
ミシガン大学（米国）

あいちサイエンスフェスティバル2011を開催



開幕宣言をする総長

あいちサイエンスフェスティバル2011が、10月1日(土)から11月6日(日)の間、愛知県全域の各会場において開催されました。同行事は今年が初開催で、函館、東京に続き、国内3例目の地域科学祭となります。県内外の35団体が121件のサイエンスイベントを行い、延べ75,000人を超える方々が参加しました。

本学は、主催機関として事務局機能を担うとともに、サイエンスイベントの提供を行いました。主な提供イベントは2つで、1つは、原則毎週土曜日に開催した市民向け講演会「先端科学技術と社会」です。初回はフェスティバル初日の10月1日(土)で、濱口総長による開幕宣言に続き、川合知二大阪大学産業科学研究所特任教授が講演しました。その後は、大島伸一国立長寿医療研究センター総長、橋本孝之日本アイ・ピー・エム株式会社代表取締役社長、益川敏英本学特別教授、本学特別招へい教授である飯島澄男名城大学理工学研究科教授、松沢哲郎京都大学霊長類研究所長を迎え、それぞれ、専門分野の最先端技術と社会との関係性について講演しました。



益川特別教授による講演会の様子

もう1つの主なイベントは、平日の夜に開催した「さかえサイエンストーク」と題するイベントです。これは、本学や本学以外の大学、企業から幅広い分野の研究者や専門家を招き、科学の話題を取り上げながら一般市民と双方向で対話するイベントで、会期中に20回実施されました。参加者は飲み物を片手に、曜日替わりで会場となったジュンク堂書店ロフト名古屋店、名古屋テレビ塔タワーステージ、ガロンコーヒー丸栄店でトークを楽しみました。

最終日には、グランドクロージング企画として、日本科学技術ジャーナリスト会議との共催で「原発報道を振り返る」と題したシンポジウムを行いました。初めに、柴田鉄治元朝日新聞社会・科学部長、瀬川至朗元毎日新聞科学環境部長が登壇し、それぞれ「原発報道『失敗』の歴史」、「原発報道は大本営発表だったのか」と題し、基調講演を行いました。続いてパネルディスカッションが行われ、室山哲也 NHK 解説主幹をファシリテータに、新聞社部長や放射線の研究者等6名で議論を行いました。

なお、これらの主要な企画のほとんどについて、同フェスティバルのホームページ (<https://aichi-science.jp/>) で、当日の様子を録画した映像を公開しています。

あいちサイエンスフェスティバルは、独立行政法人科学技術振興機構の科学コミュニケーション連携推進事業「地域ネットワーク支援」に採択された「あいちサイエンス・コミュニケーション・ネットワークの構築」事業の一環として、今後毎年10月に実施する予定となっており、来年はポートメッセなごや及び中部国際空港セントレアを会場とする2012年国際航空宇宙展 (Japan Aerospace 2012) と連携して開催する見込みです。同ネットワークは、本学や愛知県を含む11機関で形成されており、フェスティバル開催のほか、年間を通じてサイエンストークやセミナーなどを行い、愛知県におけるサイエンスコミュニケーション活動を推進していきます。

第34回経営協議会を開催

第34回経営協議会が、10月24日(月)、鶴舞地区にある鶴友会館において開催されました。

会議では、濱口総長からのあいさつの後、平成23年度予算執行計画、人事院勧告等への対応、非常勤理事の再任について、総長、各担当理事からそれぞれ説明が行われ、審議の結果了承されました。



会場の様子

続いて、平成22年度に係る業務の実績に関する評価、平成24年度概算要求、平成22事業年度決算に係る財務分析、東海地区国立大学法人の事務連携、平成23年度名古屋大学国際プログラム群入学試験の出願者、合格者及び入学者数、第7回ホームカミングデイ(創基140周年)の実施、名古屋大学基金について報告が行われました。

外部委員の方々からは、国際化に伴う企業が求める学生像の変化、基金の使途、運用方法等に関して貴重な意見が寄せられました。

なお、同日には第11回総長選考会議も開催され、議長の選出及び総長に対する中間評価の検討について審議が行われました。

あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムシンポジウムを開催

あいち男女共同参画社会推進・産学官連携フォーラムシンポジウムが、10月19日(水)、野依記念学術交流館において、愛知県、名古屋市、愛知県経営者協会との共催により開催されました。

「イクメンについて考える～男女が共に働き続けるために～」と題して行われた同シンポジウムでは、初めに、男

女共同参画を担当している藤井理事からあいさつがあり、続いて濱口総長が「女性の活躍が21世紀を救う」と題した基調講演を行いました。

続くパネルディスカッションでは、田村哲樹法学研究科教授をコーディネータとして、稲葉和子愛知労働局雇用均等室長をはじめとする5名のパネリストが、産学官それぞれの立場から「イクメンの理由～イクメンは単なるトレンドか?～」をテーマに話し合いました。

併せて、名古屋大学こすもす保育園及び学内学童保育所が紹介され、事前希望者には、両園の見学会も行われました。

終了後、参加者からは、「仕事と育児の両立を支援する取り組みの重要性についてさらに関心が深まった」等の声寄せられました。



パネルディスカッションの様子

日本・ウズベキスタン学長会議を開催

日本・ウズベキスタン学長会議が、11月1日(火)、野依記念学術交流館において開催されました。

同会議は、本学が設置した名古屋大学ウズベキスタン事務所を活用し、日本・ウズベキスタン間の大学交流の促進を図るために、本学がホスト校となり開催したものです。日本側からは国立、私立の16大学のほか、文部科学省、国



会議の様子

際協力機構中部国際センターが、ウズベキスタン側からは各地域を代表する10大学のほか、ウズベキスタン共和国大統領府及び中高等教育省、駐日ウズベキスタン共和国大使館、ウズベキスタン文化・芸術フォーラム基金が参加し、合計約70名の学長、理事等が出席しました。

同会議では「日本・ウズベキスタンの大学交流について－現在とその未来－」をテーマに、午前には国際交流の観点から、午後には学生交流の観点から各参加大学が発表を行いました。濱口総長は、ウズベキスタンに焦点を当てた本学の国際化の推進等についての発表を行いました。

クロージングセッションでは、各参加大学からの発表をもとに、両国の大学間交流や留学生交流をさらに推進するための方策などについて、活発な意見交換がなされました。また、ウズベキスタン共和国大統領府、駐日ウズベキスタン共和国大使館からは、同会議の開催を契機とした今後の大学間交流促進への期待が寄せられました。

会議前日にはトヨタ元町工場の視察を行ったほか、会議終了後にはES総合館内ノーベル賞展示室、豊田講堂等の見学が行われました。

平成23年度秋季新入留学生歓迎懇談会を開催

平成23年度秋季新入留学生歓迎懇談会が、11月7日(月)、南部食堂において開催されました。この懇談会は、今秋入学した留学生を対象に、今後の留学生活が実りのあるものになるよう激励し、留学生と留学生関係教職員との懇談を通して、一層の相互理解と交流を深めることを目的として開催されたもので、当日は、新入留学生、教職員な



懇談会の様子

ど約300名の参加がありました。

最初に濱口総長から歓迎と激励のあいさつがあり、これを受け、新入留学生を代表して、大学院工学研究科のグエン・ソン・ホンさん(ベトナム)と、大学院文学研究科の王静さん(中国)が、それぞれ日本での留学について抱負を述べました。続いて、名古屋大学留学生会から本学における留生活動などが紹介され、その後、宮田理事が乾杯の発声を行い懇談に移りました。

会場では、新入留学生が総長や教職員を囲んでこやかに歓談したり、記念撮影したりする姿があちらこちらで見られました。

最後に町田留学生センター長が閉会のあいさつを行い、大盛況のうちに終了となりました。

平成23年度日本数学コンクール表彰式を挙

平成23年度日本数学コンクール表彰式が、11月3日(木)、シンポジオンホールにおいて挙

行されました。今回は、受賞した生徒とその保護者等、約100名が出席しました。

表彰式では、濱口総長、日本数学コンクール委員会委員長を務めている宮田理事、小島寿文愛知県教育委員会指導



受賞者を囲んでの集合写真

主事からあいさつがあった後、8月7日(日)に名古屋・大阪・三重・和歌山の4会場で行われた第22回日本数学コンクール、第15回日本ジュニア数学コンクールで優秀な成績を収めた44名、及び応募件数が118件にのぼった第12回日本数学コンクール論文賞で優秀な論文を作成した3組6名に対し、総長、宮田理事らから賞状、メダル及び副賞が授与されました。

続いて、日本数学コンクールのシニア大賞、日本ジュニア数学コンクールのジュニア大賞、論文賞のシニア金賞、ジュニア金賞を受賞した生徒からそれぞれ受賞の喜びと感謝の言葉が述べられました。

表彰式終了後には、問題作成に携わったコンクール実行委員の教員が、問題に対する解答とそこに辿り着く過程や考え方について、生徒と会話しながらポスターセッション形式で解説をしました。

第7回高等研究院レクチャーを開催

第7回高等研究院レクチャーが、11月9日(水)、理学南館大講堂において開催されました。

「素粒子質量起源の謎に迫る - 坂田昌一先生誕100年と素粒子宇宙起源研究機構 (KMI) の創設 -」をテーマとした今回は、本学教職員、学生や一般の方など、約200名の参加がありました。



益川特別教授による講演の様子

レクチャーは、杉山 直理学研究科教授の司会により進められ、まず、益川敏英本学特別教授が、素粒子物理学を先導した元本学理学部長である故坂田昌一博士の生誕100周年を記念し、「坂田先生の生誕100年にあたって」と題して、坂田博士の業績をわかりやすく解説し、「議論は自由に、研究室では平等だ」といった坂田博士の理念を紹介しながら、自由闊達な議論を行うことの重要性を強調しました。

次に、棚橋 KMI 基礎理論研究センター長が「KMI での素粒子論研究：素粒子質量起源の謎」と題し、KMI の組織及び目標を紹介するとともに、現在の素粒子標準理論が抱える未解決問題、特に素粒子質量起源の謎について、「何が問題なのか」、「どのような解決が考えられるのか」、「それらがどのように検証されるのか」という観点から解説しました。

最後に、青木保道同センター准教授が、「高性能計算機システム・ファイで素粒子の質量起源の謎に挑む」と題し、今年3月から稼動し、素粒子物理で謎となっている素粒子の質量生成機構の解明を挑んでいる高性能計算機システム - φ (ファイ) - による研究の最前線について説明しました。

第73回防災アカデミーを開催

第73回防災アカデミーが、10月17日(月)、環境総合館レクチャーホールにおいて開催されました。

今回は、野田利弘工学研究科教授が、「液状化を含む地盤の地震時被害～なぜ起こるのか？どのようにして防ぐのか？」と題し講演を行いました。

野田教授は、土木分野の土質力学・地盤工学が専門で、



会場の様子

土構造物の挙動や被害について、詳細な予測評価手法や実験・被害事例調査などに基づいて研究をしており、東日本大震災では、過去最大級の液状化被害が発生した浦安市などの調査分析・報告を行っています。

講演ではまず、液状化による被害の特徴についてまとめ、次に、液状化の発生原因と対策方法について、実例と教材を用いて説明しました。続いて、東日本大震災における液状化被害について説明し、関東地域で甚大な被害が発生したのは、海岸沿いや河川の新しい埋立地が、数十メートルの深さに及ぶ軟弱地盤で増幅された揺れにより、長時間にわたって揺れ続けたことに主な原因があると解説しました。さらに液状化被害のほかに、仙台市周辺の造成宅地の被害、津波による防潮堤、護岸等の破壊など、東日本大震災で地盤被害に関連した災害の全貌を話しました。最後に、これらの結果を名古屋市の地盤状況に当てはめ、名古屋港周辺には新しい埋立地が広がっており、将来起こり得る大地震に際して液状化の可能性が高いとの意見を述べました。

当日は159名の参加があり、会場は満員となりました。

神経変性疾患に対する革新的治療法開発

錫村 明生 環境医学研究所教授

アルツハイマー病やパーキンソン病などで代表される神経変性疾患という病気があります。原因は不明で、疾患ごとに症状は異なりますが、いくつかの共通点があります。まず、慢性に進行すること、病理所見で、1. 神経細胞が死んで無くなる、2. 神経細胞の無くなった部位はグリア細胞で置き換わる（グリオージス）、3. 異常蛋白の蓄積（アミロイド、タウなど）がみられる、4. 疾患ごとに特有の神経とその経路が傷害される、などの共通点があることです。グリオージスは長く病変後の焼け跡（外傷後の瘢痕）と考えられていましたが、最近では、活性化され、さまざまな炎症因子を産生するグリア細胞による慢性炎症（神経炎症；Neuroinflammation）として捉えられようになって来ました。すなわち、異常蛋白の蓄積で神経細胞が死ぬのが主体ではなく、活性化したグリア細胞による慢性炎症により神経細胞が死んで、認知症や運動異常がでる病態であるとい

う仮説が有力になっています。

我々は、傷害を受けた神経細胞の周囲に存在する活性化されたミクログリアやアストロサイトなどのグリア細胞に注目して、神経変性疾患の病態解明、治療法開発に取り組んできました。これらの細胞は、傷害を受けた神経細胞からのシグナルにより活性化され、神経細胞を保護する作用を担っていますが、反対に神経毒を産生して神経細胞を傷害しうることも明らかになっています。ミクログリア由来の神経傷害因子として、炎症性サイトカイン、一酸化窒素（NO）、活性酸素、興奮性アミノ酸などが挙げられています。我々はまず、ミクログリアが作る因子で最も神経毒性が強いのはグルタミン酸であることを突き止めました。ついで、その産生、放出機序を検討したところ、これらが生理的なものとは異なり非常に特異であることを発見しました。すなわち、生理的にはグルタミン酸はトランスアミナーゼの作用により

産生され、グルタミン酸トランスポーターを介して取り込みや、放出されるのに対し、活性化ミクログリアでは細胞外のグルタミンを器質としてグルタミナーゼの作用によって産生され、ギャップ結合から放出されることを明らかにしました（図1）。活性化したミクログリアではグルタミナーゼ、ギャップ結合ともに増加しています。したがって、治療戦略と

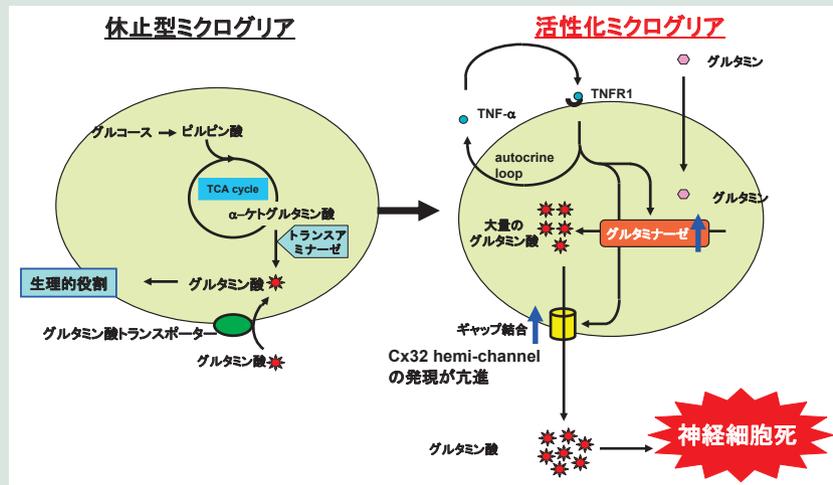


図1

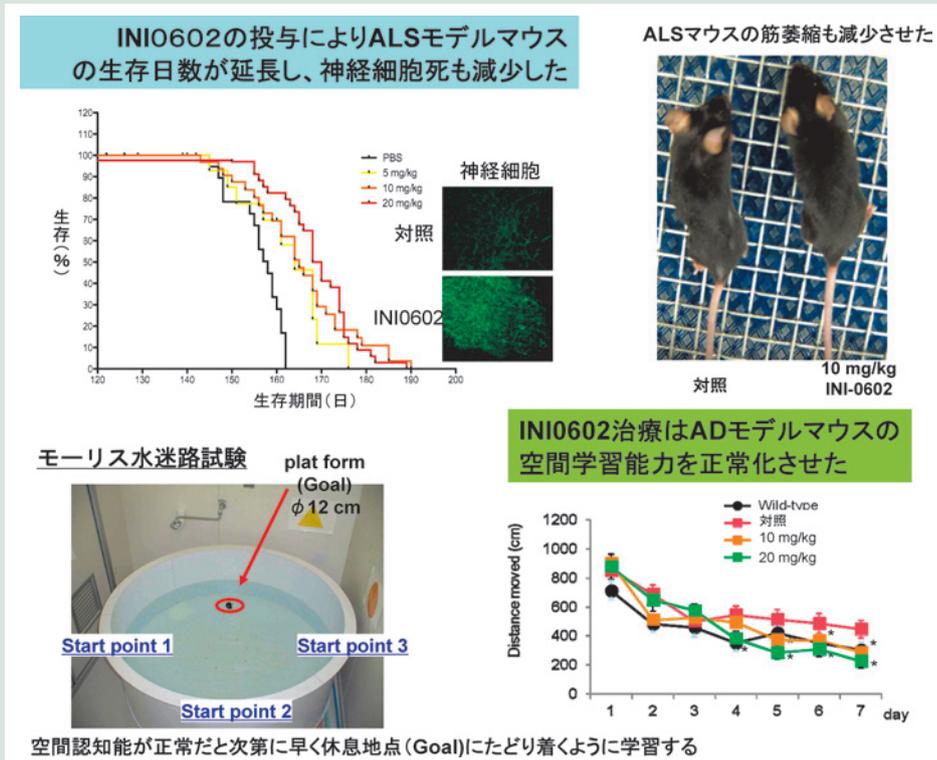


図2

しては、グルタミンアーゼ阻害、あるいはギャップ結合阻害により、生理的なグルタミン酸産生系に影響を及ぼさず（副作用を誘導することなく）病的な活性化ミクログリア由来のグルタミン酸産生のみを阻害することが可能であるはずで。そこで、ギャップ結合阻害薬のカルベノキソロン（生薬の甘草の主成分）を基に脳内へ移行する薬剤（INI0602）を合成し、筋萎縮性側索硬化症（ALS）、アルツハイマー病（AD）のモデルマウスの治療を試みました。その結果、INI0602はALSモデル

マウスの筋萎縮、生存を有意に延ばし、病理像でも脊髄の運動神経の脱落を著明に軽減させました。ADモデルでも、認知能（記憶、空間認知）障害の著明な改善が見られました（図2）。

これらの成績は、慢性のグリア炎症における、神経傷害因子を特異的に押さえることが多種の神経変性疾患の治療になりうる可能性を示しており、原因も不明で治療法も無いこれら多くの神経難病の新たな治療薬として有望と考えられ、現在薬剤の最適化に取り組んでいます。

名古屋大学環境医学研究所免疫系分野 教授

趣味は水泳とゴルフ（名大ゴルフ部部长）

昭和50年岐阜大学医学部卒業。

名古屋大学医学部第一内科、ペンシルバニア大神経内科、藤田保健衛生大神経内科、奈良医大神経内科を経て、2001年より現職。

平成20年より日本神経免疫学会理事。

すずむら あきお



星野 崇宏
 大学院経済学研究科准教授

偏りのある情報を補正するための統計科学…マーケティング意思決定への活用

Web上に存在するブログやソーシャルネットワークワーキングサービス、電子掲示板などのソーシャルメディア（あるいは消費者生成メディア）は近年では人々の消費活動や日常の余暇活動、さらには投票に至るまで、意思決定に影響を大きく与える非常に重要な情報源となりつつあります。さらに情報量が量的に膨大で、また情報取得が極めて簡単なことから、マーケティング、ファイナンス、政治学、社会心理学などの研究者、さらには政府機関までもがネット上でのソーシャルメディアから得られる情報の利活用を行いはじめています。

しかし、当然のことながらこのようなネット上の情報発信は「書きたい人だけが書く、答えたい人だけが答える」といった偏ったデータ（図1）です。本来関心のある消費者や国民全体の意見・購入頻度・行動などを知りたいという目的からすれば、情報の信頼性が大きな問題となります。私がこれまで実際に調べたところ、ブログの書き込みを行っている人の年齢や職業、年収などはもちろん、意見や行動についての分布も一般消費者か

ら大きく乖離していることがわかっています（図2）。

実はこのような「偏りのあるデータから本来関心のある集団（母集団）の情報を知る」という問題は以前から統計学・計量経済学において「選択バイアス」という名前で知られていましたが、特定の応用や理論モデルに依存する形で議論されていました。そこで私は、JST さきがけ「知の創生と情報社会」領域、科学研究費補助金若手Aの研究代表者として、これまで開発されてきた選択バイアスの補正についての統計的手法をベースに、ソーシャルメディア上における書き込み情報やブログのトラックバックなどを含めたWeb上の意見分布、ソーシャルネットワーク構造情報などに関する偏りを補正する汎用的な方法論についての研究を行っています。

ますます高度化する情報社会において、正しい意思決定を支援するための方法論の開発と応用を進めることで実社会に貢献していきたいと考えています。

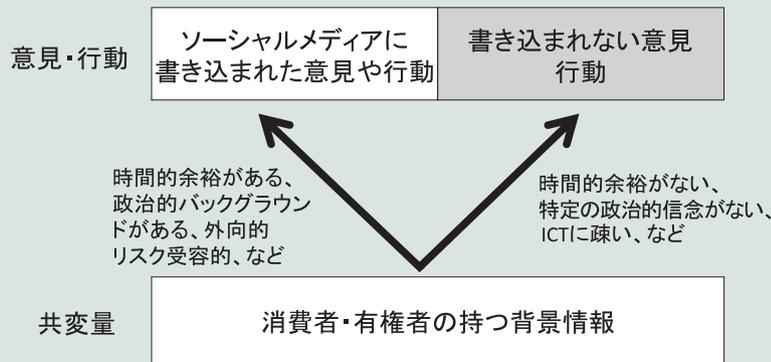


図1 ソーシャルメディアでの発信情報の「選択バイアス」

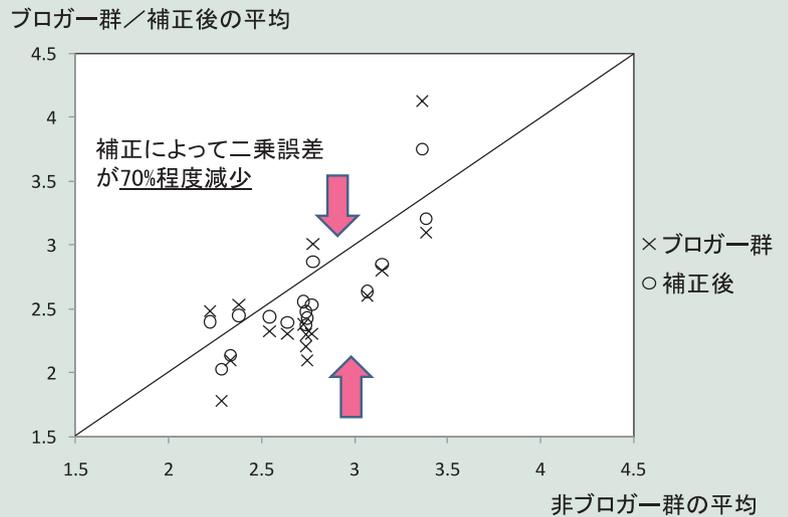


図2 「ブロガーの意見の「選択バイアス」による偏り」と補正の例

*ブロガー群=個人の同定された大規模 Web アクセスログパネル調査のうちブログに書き込みをした人たちのこと

2008年ノーベル物理学賞受賞記念植樹式を挙

●大学院理学研究科

大学院理学研究科は、10月25日(火)、理学部B館北側において、益川敏英本学特別教授、小林 誠本学特別教授による2008年ノーベル物理学賞受賞の記念植樹式を挙

「クォークが少なくとも3世代(6種類)存在することを予言する(CP)対称性の破れの起源の発見」の功績に



植樹を行う益川特別教授(左)と小林特別教授(右)

より2008年にノーベル物理学賞を受賞した益川・小林両特別教授は、本学の理学部及び大学院理学研究科で学んで博士号を取得しています。今回の植樹は、両博士の受賞を記念し、本学における優れた教育と研究の流れを長く伝えていくことを目的に行われました。現代の素粒子物理学の根幹となる標準模型確立の道を拓いた両博士の受賞を記念するにあたり、近代物理学の礎を築いたニュートンのリンゴの木が選ばれました。

植樹式では、濱口総長をはじめとして、当日開催中であつた素粒子宇宙起源研究機構主催の国際シンポジウムの参加者も含め100名以上の方が見守る中、益川・小林両特別教授により、リンゴの苗木に土がかけられました。

ニュートンのリンゴの木は、1964年、英国より本学理学部初代学部長も務めた柴田雄次学術院長(当時)に贈られ、東京大学理学部附属小石川植物園で育てられてきました。そのリンゴの苗が、47年の時を経て名古屋の地にノーベル賞の記念植樹としてもたらされたことは、大変意義深いことであり、この素晴らしい歴史が本学の学生に引き継がれていくことが願われます。

坂田昌一博士生誕100周年記念碑の除幕式を挙

●大学院理学研究科、素粒子宇宙起源研究機構

大学院理学研究科及び素粒子宇宙起源研究機構は、10月27日(木)、ES総合館南側において、元本学理学部長である故坂田昌一博士の生誕100周年記念碑の除幕式を挙

坂田博士は1911年1月18日に生まれ、本学理学部の素粒子論研究室(E研)を率いて、坂田モデルをはじめとする



除幕された記念碑の前に

世界的な成果を挙げました。坂田博士の教えが、2008年の益川敏英本学特別教授、小林 誠本学特別教授のノーベル物理学賞受賞につながり、さらに、2010年4月には素粒子宇宙起源研究機構を創設するに至ったことから、生誕100年にあたる今年、坂田博士の功績を長く伝えるため、記念碑を設置することになりました。

記念碑には、坂田博士が他界する1年ほど前に色紙に書き残した「兼聴則明 偏信則暗」(「兼(あわせ)聴けばすなわち明し、偏(かたより)信ずればすなわち暗し」)の文字が刻まれています。これは、「資治通鑑」にも収録されている魏徴の言葉で、様々なアプローチが競い合う混沌とした時代にあつて、正しい方向を指し示した博士の物理観の簡潔な表現であり、後世への遺言とも言うべきものです。

当日は、坂田家の方々、E研の卒業生ほか多数の参加者が見守る中、坂田博士の長男である坂田文彦茨城大学名誉教授と濱口総長により、除幕が執り行われました。

なお、記念碑の設置のほか、生誕100周年記念事業として、「坂田昌一博士デンマーク日記」が出版され、10月27日(木)、28日(金)の両日には「坂田昌一博士生誕100周年記念国際シンポジウム」が開催されました。

第26回国際学術シンポジウムを開催

●大学院経済学研究科

大学院経済学研究科附属国際経済政策研究センターは、10月28日(金)、シンポジオンホールにおいて、キタン会との共催で第26回国際学術シンポジウムを開催しました。今回は「危機から新たな成長にー世界金融危機・東日本大震災とアジアー」をテーマとしました。

初めに、司会の中屋信彦国際経済政策研究センター准教



パネルディスカッションの様子

授が開会を宣言した後、濱口総長、多和田経済学研究科長があいさつしました。次いで、金 泳鎬 柳韓大学総長が基調報告を行いました。

続く第1セッション「二つの危機と中部経済」では、木村経済学研究科副研究科長の司会で、新美篤志トヨタ自動車株式会社副社長、李 均東駐名古屋韓国総領事、紀村英俊中部経済産業局長が報告しました。第2セッション「危機後東アジアの新動向」では、薛 進軍同センター教授の司会で、大橋英夫専修大学教授、ベトナムのグエン・ティ・ビック・ハー貿易大学教授、平川 均同センター教授が報告しました。第3セッション「危機を越えてーアジアの成長と日本企業の新戦略ー」では、杉田伸樹同センター教授の司会で、金総長、大橋教授、ビック・ハー教授、平川教授の4名によるパネルディスカッションが行われました。

会場では、参加者がパネリストへ質問する姿が見られました。最後に、岡田邦彦キタン会会長及び金井同センター長から閉会のあいさつがありました。

材料バックキャストテクノロジーシンポジウムを開催

●大学院工学研究科

大学院工学研究科附属材料バックキャストテクノロジー研究センターは、10月17日(月)、ES 総合館において、材料バックキャストテクノロジーシンポジウム「太陽エネルギー社会構築のための材料テクノロジーの開拓」を開催しました。

このシンポジウムは、研究者・技術者・学生等を対象と



会場の様子

して、太陽エネルギー社会を構築するための材料テクノロジーについて、その必要性、現在の技術水準及び将来の技術開発課題を明らかにするとともに、技術開発をより迅速に進展させるための施策について議論する目的で実施され、217名の参加がありました。

まず、河本材料バックキャストテクノロジー研究センター長が、太陽エネルギー社会を実現する材料テクノロジーの必要性を訴えた後、鈴置工学研究科長が材料テクノロジー研究への期待を表明し、あいさつとしました。

続いて、様々な科学技術分野の講師が、それぞれ「エネルギー社会と生存の条件」、「レアメタルの現状と代替戦略の前進」、「100GWを目指す太陽光発電ー材料開発におけるブレイクスルーー」、「熱電変換技術の現状と今後の展開」、「自動車部材の軽量化・高機能化技術」と題し講演を行い、熱意溢れる質疑・討論が行われました。また、ポスター発表では、大学側のシーズとして、28件の研究成果が発表され、参加者との交流が活発に行われました。

同センターは、今後も東海地域の産学官との連携の強化連携を深め、「材料バックキャストテクノロジー」という視点から、研究や人材育成の輪を広げていく考えです。

第15回ベンチャー・ビジネス・ラボラトリーシンポジウムを開催

●ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー

ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー（VBL）は、11月7日（月）、8日（火）の両日、VBLフロンティアプラザにおいて、第15回VBLシンポジウムを開催しました。

初日は、ナノコラム、ナノワイヤ、ナノチューブをテーマに、菊池昭彦上智大学理工学部准教授による「窒化物半導体ナノ結晶の作製とデバイス応用」、福山敦彦宮崎大学准教授



講演する菊池准教授（左）と杉山准教授（右）

による「Si基板上無触媒GaAsナノワイヤの光学的特性評価」と題した招待講演が行われました。菊池准教授は窒化物のナノコラム構造の作製に成功しており、その結晶構造の評価ならびに光デバイスへの応用について紹介しました。また福山准教授は、光学測定によって行ったGaAsナノワイヤ結晶の特性の評価について話しました。

2日目は、化合物半導体の超格子・量子構造をテーマに、杉山正和東京大学工学系研究科准教授による「高効率太陽電池を目指した半導体超格子の応用」、高橋正光独立行政法人日本原子力研究開発機構量子ビーム応用研究部門グループリーダーによる「放射光を利用した半導体ナノ構造成長の観察」と題した招待講演が行われました。杉山准教授は、エネルギー問題解決の鍵となる太陽電池開発の現状や半導体量子構造を利用した太陽電池の開発について説明しました。高橋グループリーダーは、世界最高性能の放射光源であるSPRING-8を用いて観察した半導体量子構造形成過程について話しました。

招待講演者による講演のほか、学内の研究者6名による研究成果も報告され、VBLが担当する最先端理工学特論の授業の一環として同シンポジウムを聴講した学生も含めた多数の参加者らにより、活発な質疑応答が行われました。

第13回「まちとすまいの集い」を開催

●大学院環境学研究科

大学院環境学研究科は、11月5日（土）、ES総合館ESホールにおいて、第13回「まちとすまいの集い」を開催しました。今回は、「3.11後のまちとすまい－備えあれば未来あり－」をテーマとし、92名が参加しました。

まず、大森博司環境学研究科教授から、今年3月11日に発生した東日本大震災を契機に、まちとすまいに関する



質疑応答の様子

人々の意識は大きく変わりつつあり、復興や今後の備えのために何をすべきかを考えたいという今回の企画の主旨について説明がありました。

続いて、松岡利昌施設計画推進室特任准教授が「BCP（事業継続性計画）とDRP（災害復旧計画）」と題し、震災発生時の外国企業の対応等を紹介し、BCPやこれを支えるファシリティマネジメントの考え方について講演しました。次に、奥宮正哉環境学研究科教授が「無理なく減らして快適に」と題し、原発事故を契機にエネルギーシステムのあり方が問い直されている現状を踏まえ、ピークカットのための方策や自然エネルギーの活用について紹介しました。最後に、護雅史同准教授が「大震災に学び、来るべき地震に備える」と題し、東日本大震災における地震の揺れそのものによる建物やインフラの被災状況について報告を行い、東海地方で発生することが予測される大地震からまちとすまいを守るために為すべきことについて話しました。

講演後は、講演者が参加者からの質問に答える形でディスカッションが行われ、大学と地域の連携、防災危機意識の維持等について活発な質疑応答が行われました。

世界化学年2011特別展示「祖国から見たマリー・キュリー」を開催

●物質科学国際研究センター

物質科学国際研究センターは、10月7日(金)から17日(月)までの間、野依記念物質科学研究館ケミストリーギャラリーにおいて、特別展示「祖国から見たマリー・キュリー」を開催しました。これは、世界化学年2011(International Year of Chemistry 2011)を記念して実施したものです。



会場の様子

マリー・キュリーがノーベル化学賞を受賞してから100年目にあたる2011年は世界化学年であり、これは、日本学術会議化学委員会が国際純正・応用化学連合(IUPAC: International Union of Pure and Applied Chemistry)からの呼びかけに賛同し、日本学術会議化学委員会 IUPAC 分科会と共にユネスコ(国際連合教育科学文化機関)に働きかけをした結果、2008年の国連総会で決定されたものです。

今回は、マリー・キュリーの秘蔵写真が数多く使われた19枚のポスターが展示され、研究者としてだけでなく、女性として、母としてのマリー・キュリーの顔も紹介されました。同展示が始まる1ヶ月程前には、異物質科学国際研究センター長が、ポスターを作成した駐日ポーランド共和国大使館を訪れてポーランド大使と会談を行い、世界化学年を様々な地域で盛り上げたい旨確認しました。

また、会期中の15日(土)には第7回ホームカミングデイが開催されており、立ち寄った方からは「偶然ながら大変貴重なものを見る事が出来た」との声も聞かれました。

ICCAE 2011年度第6回オープンセミナーを開催

●農学国際教育協力研究センター

農学国際教育協力研究センター(ICCAE)は、11月11日(金)、2011年度第6回オープンセミナーを開催しました。

今回は、ロエル・スラルタ フィリピンネ研究所科学専攻専門官が、「アジア天水田における変動土壌水分ストレス条件下でのイネ生産に対する根の可塑性の機能的役割」と題し講演しました。



講演の様子

天水田とは、灌漑設備がなく雨水に依存してイネを栽培する水田を指し、アジアの広範に存在しています。しかし、生産性は非常に低く、天水田の生産性の向上がアジア全体のイネ生産量を底上げする鍵となります。従来の研究では、生産性を制限する主要因を乾燥ストレスとして捉えてきましたが、それに対しスラルタ専門官は、天水田圃場の土壌が乾燥と湛水を繰り返していることに注目し、土壌水分の変動によるストレスが天水田における重要な生産制限要因になっていることを初めて見出しました。講演でスラルタ専門官は、土壌水分が変動する条件下において、イネの生産性を維持するために根系が発揮する可塑性の機能的役割と、その遺伝解析に関わる研究の現状について紹介しました。

スラルタ専門官は、本学大学院生命農学専攻で博士学位を所得した後、同研究所において、特にイネの水ストレスに対する適応性について研究を行っており、2009年フィリピン稲作研究所優秀研究者賞、フィリピン国立科学技術アカデミー2010年優秀若手科学者賞、第20回フィリピン作物科学学会連合最優秀論文賞、2011年(第5回)若手外国人農林水産研究者表彰など数多くの賞を受賞しています。

第4回2011高校生向けセミナーを開催

●法政国際教育協力研究センター

法政国際教育協力研究センターは、11月5日(土)、同センター2階CALEフォーラムにおいて、第4回2011高校生向けセミナー「ASIA-アジアの法と社会について考えよう！」を開催しました。同セミナーは、高校生にアジアの法と社会について学ぶ機会を提供することで、将来の進路選択の参考にしてもらうことを目的として平成20年度



記念撮影の様子

から毎年開催しており、今年で4回目となります。

まず、鮎京法学研究科長からアジアの法と社会を学ぶ意義についての講義があり、続いてグループに分かれて、ウズベキスタン、カンボジア、ベトナム、モンゴルの各国が抱える社会問題についてディスカッションを行いました。ディスカッションの途中にはアジア各国のお茶やお菓子もふるまわれ、雰囲気が和んだ後、各グループによる全体発表が行われました。参加した高校生にとって、欧米と比べて普段あまり馴染みがないアジアの国々について考えることで、自分がアジアについて無知であることを認識し、グローバル化が進展する現代においていかに生きていくべきかを考える契機となったようです。

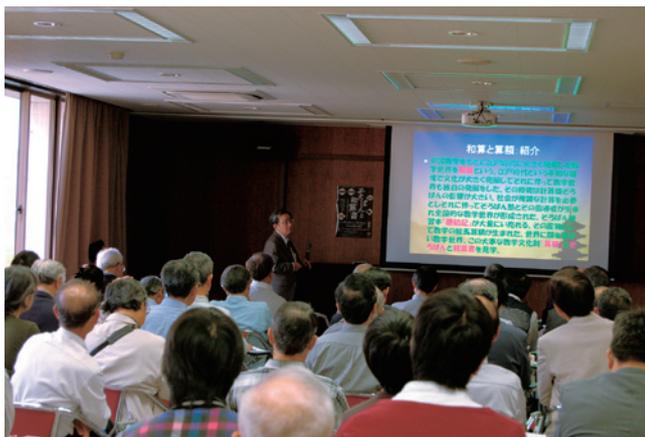
なお、同セミナーは法学部・大学院法学研究科の学部学生、大学院生、留学生によって企画、立案、運営されており、彼らにとっても1つのプロジェクトを実行する貴重な機会となるとともに、学部学生、大学院生と留学生とが交流する機会にもなるため、相互にとって良い刺激になっています。

2011年秋季特別展を開催

●附属図書館

附属図書館及び同館研究開発室は、2011年秋季特別展「そろばんと和算書-日本の計算文化にふれる-」を10月14日(金)から11月4日(金)まで開催しました。

展示会には、平成22年度に本学元職員藤本保紀氏より寄贈された600点以上の資料群の中から、江戸時代の和算書及びそろばんとそろばんに関する資料65点が展示された



講演会の様子

ほか、愛知県指定有形民俗文化財である引馬神社の算額、岐阜県重要有形民俗文化財である明星輪寺の算額4点などが出展されました。

「百桁そろばん」などの珍しいそろばんや、和算書の「塵劫記」に関連する資料をはじめとする刊本や写本も展示され、当時の庶民が計算するというのにいかに熱中していたかが紹介されました。また、展示室に併設された体験コーナーでは、小学生や中学生、高校生が算数や数学パズルに挑戦していました。来場者は、一般の方を中心に1,600名にのびりました。

10月29日(土)には、藤本氏が「そろばんの繪・色色」、本学非常勤講師の深川英俊氏が「和算書と算額」と題しそれぞれ講演し、80名近くの参加がありました。身近なそろばんや数学の歴史を物語る和算書や算額についての講演に多数の質問があがり、講演会終了後には多くの参加者が展示室に移動し、講師による解説を聞きながら熱心に展示に見入っていました。

第3回地球教室を開催

●博物館



石包丁を作る参加者の様子

博物館は、10月29日(土)、10月30日(日)の2日間、第3回地球教室「河原の石で包丁をつくろう！」を開催しました。

地球教室は、名古屋市科学館との共催で行っている地域貢献事業で、野外での自然観察と博物館での座学を組み合わせた体験学習を、年に4回開催しています。

今回は岩石について学習し、各務原市鵜沼の木曾川の河原で、堆積岩の一種であるチャートの露頭観察や河原石の採集を行いました。続いて、採集した石で包丁を作って岩石の種類や性質の違いを体感し、さらに製作した石包丁で肉や野菜を切ってカレーうどんを作り、機能性を確かめました。参加者は、地質学的内容の習得のみならず、石包丁の製作と利用を通して人文学的なアプローチで岩石に対する理解を深め、総合的な学習を実践しました。

なお、これらの作業は、参加者の補助と安全確認のために、愛知大学名古屋一般教育研究室の援助を受けて行われました。

ミクロの探検隊を開催

●博物館



羽の観察に取り組む参加者

博物館は、11月12日(土)、ミクロの探検隊「トリの羽の不思議」を開催しました。今回は小・中学生12名を含む19名が参加しました。

初めに野鳥の羽の構造や特徴の説明があり、カラスの正羽、ヒドリガモ等の綿羽、カルガモとマガモの翼鏡の羽、フクロウの羽を肉眼で観察し、各自が手にとって感触を確かめました。次に、同じ羽を実体顕微鏡で拡大して観察し、スケッチをしてその特徴に関してメモを取り、さらに走査型電子顕微鏡でも同様に、観察と特徴の描写を行いました。

参加者は、実体顕微鏡の数十倍の拡大倍率から電子顕微鏡の数百倍の拡大倍率に移り、最初は戸惑っている様子でしたが、次第に見ているものを理解し、ミクロの世界の構造美を楽しみました。さらに、小・中学生には電子顕微鏡の操作を体験してもらい、好評を博しました。

和式馬術供覧を開催

●博物館



和式馬術部員による流鏝馬披露

博物館は、11月13日(日)、教育学部附属中・高等学校の運動場において、同学校及び木曾馬保存会との共催により、和式馬術供覧を開催しました。

当日は、和式馬術部員が馬上武術、打鞠、流鏝馬等の演武を行ったほか、同高等学校の弓道部員による遠的騎射も行われました。演武の後は、和種馬への体験乗馬の機会も設けられ、乗馬を体験した来場者は西洋馬との違いを実感したようでした。

同行事は平成18年より毎年実施されていますが、今回は約250名の方が来場し、「来年もぜひ来たい」との声が多く聞かれました。また、「このような文化の継承・各地方との交流も大学の大事な仕事だと思う」との意見も寄せられました。

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
1 15日閉幕した日本地震学会で、山岡耕春環境学研究科教授は「研究成果がどう使われているかに関心を持つべきで、使われ方がおかしければチェックする意識が必要」と話す	10.15 (土) 10.16 (日) 10.20 (木)	朝日 (夕刊) 日経 (夕刊) 日経 (夕刊) 中日 (朝刊)
2 本学から名誉博士号を授与された日本ガイシ株式会社相談役柴田昌治氏が講演	10.16 (日)	中日 (朝刊)
3 医学系研究科医療システム管理学寄附講座「被災地域における緊急用医療機関検索サイトの運営」が三井物産環境基金2011年度東日本大震災復興助成(第3回募集)案件に選ばれる	10.16 (日)	朝日 (朝刊)
4 春名幹男国際言語文化研究科特任教授は前泊博盛著「沖縄と米軍基地」の書評を執筆する	10.16 (日)	中日 (朝刊)
5 京都女子大学法学部開設記念フォーラム開催：11月5日 平川宗信本学名誉教授が講演	10.16 (日)	読売
6 第14回全日本学生グライダー新人競技大会：本学は団体で3位となる	10.17 (月)	朝日 (朝刊)
7 本学経営協議会委員の橋本孝之氏は「地球を、より賢く、よりスマートにーITの可能性ー」と題して講演する	10.17 (月)	日経 (朝刊)
8 川村正彦氏本学卒業生は低身長について解説する	10.17 (月)	中日 (朝刊)
9 現代日本誤百科 (510)：「非常以外は」開閉しない 町田 健文学研究科教授	10.17 (月)	中日 (朝刊)
10 著作：「三連動地震迫る」木股文昭環境学研究科教授	10.17 (月) 10.30 (日) 11.10 (木)	中日 (朝刊)
11 高木 新理学研究科准教授ら 動物細胞の形を制御する分子の仕組みを解明	10.18 (火)	日刊工業
12 現代日本誤百科 (511)：「巻き添い」は避けたい 町田 健文学研究科教授	10.18 (火)	中日 (朝刊)
13 春名幹男国際言語文化研究科特任教授は「オバマは若者を利用できるか」というタイトルで論説する	10.18 (火)	朝日 (朝刊)
14 鷲谷 威環境学研究科教授は大規模地震対策特別措置法について「当時は予知に楽観的な見方があったが、研究が進んで簡単ではないとわかってきた」と話す	10.18 (火)	朝日 (朝刊)
15 日本パシワ (日本汎太平洋東南アジア婦人協会) 愛知支部創立記念の会開催：11月19日 森 郁恵理学研究科教授が講演	10.18 (火)	中日 (朝刊)
16 パーキンソン病医療講演会開催：22日 平山正昭医学部保健学准教授が講演	10.18 (火)	中日 (朝刊)
17 東村博子生命農学研究科准教授、井上直子助教のグループ 排卵のホルモンが交尾で活発に分泌されることを解明	10.19 (水) 10.28 (金)	中日 (朝刊) 日刊工業
18 現代日本誤百科 (512)：「私にとったら」大事だ 町田 健文学研究科教授	10.19 (水)	中日 (朝刊)
19 春名幹男国際言語研究科特任教授は普天間問題をめぐる日米の思惑について解説する	10.19 (水)	中日 (朝刊)
20 森 保宏環境学研究科教授は岐阜県主催の「地震防災フォーラム」にパネリストとして参加する	10.19 (水)	読売
21 第5回 NAGOYA からのニッポン復活応援シンポジウム「サスティナブル (持続可能) な地域づくりと今後の復興計画②」開催：11月1日 古川忠稔環境学研究科准教授が講演	10.19 (水)	日経 (朝刊)
22 「イクメンについて考えるー男女が共に働き続けるためにー」シンポジウム開催：19日	10.19 (水)	中日 (朝刊)
23 現代日本誤百科 (513)：「アクシデントを流して」勝利する 町田 健文学研究科教授	10.20 (木)	中日 (朝刊)
24 和式馬術供覧開催：11月13日	10.20 (木) 11. 2 (水)	中日 (朝刊)
25 股関節教室開催：30日	10.20 (木)	中日 (朝刊)
26 「津波防災の日」講演会開催：11月5日 川崎浩司工学研究科准教授が講演	10.20 (木)	中日 (朝刊)
27 小田裕昭生命農学研究科准教授ら 日本人由来肝細胞の肝機能を肝臓レベルまで高めることに世界で初めて成功	10.20 (木)	日経産業新聞
28 山本裕二総合保健体育科学センター教授 サッカーに潜む三者連携の秘密を解明	10.20 (木) 10.26 (水)	毎日 (夕刊) 日刊工業
29 医学系研究科に「脳とこころの研究センター」を開設する	10.21 (金)	日刊工業
30 朝日カルチャーセンター新講座：「西洋中世美術史ー中世の写本挿絵史概説」木保元一文学研究科教授	10.21 (金)	朝日 (朝刊)
31 数理ウェブ開催：29日 伊師英之多元数理科学研究科准教授が講演	10.21 (金)	中日 (朝刊)
32 植田桐加さん本学大学院生は母校の愛知県立一宮高等学校で「私と化学」と題して講演する	10.21 (金)	読売
33 福和伸夫環境学研究科教授は聴衆に耐震化を説くため江戸時代の浮世絵を見せる	10.22 (土)	朝日 (朝刊)
34 シンポジウム「化学への招待ーすぐれもの有機材料ー」開催：11月5日	10.22 (土)	中日 (朝刊) 千種ホームニューズ
35 名大ネットワークの中心として設立された内視鏡読影センターを持つブラザー記念病院が紹介される	10.22 (土)	中日 (朝刊)
36 防災・日本再生シンポジウム「東海3県の国立大学が社会に向けて提言する巨大地震対策」：11月20日 本学ほか東海3県の国立大学が主催	10.22 (土)	中日 (朝刊) 千種ホームニューズ

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
37 「あいちサイエンスフェスティバル」の責任者を務める武田 穰産学官連携推進本部産学官連携推進室教授は、子どもの頃影響を受けた本として「日本昆虫記」を挙げる	10.23 (日)	中日 (朝刊)
38 福和伸夫環境学研究所教授は自費出版した建物耐震化を訴える絵本を紹介する	10.23 (日)	中日 (朝刊)
39 医学系研究科、医学部附属病院は「ピンクリボンスマイルウオーク名古屋大会」を支援する	10.24 (月)	朝日 (朝刊)
40 現代日本誤百科 (514) : 「そこはかたなく声が似ている」町田 健文学研究科教授	10.24 (月)	中日 (朝刊)
41 鈴木律朗医学系研究科寄附講座准教授ら NK細胞リンパ腫向け抗がん剤治療法を発見	10.25 (火)	日刊工業
42 博物館企画展「ミクロの探検隊ートリの羽の不思議ー」開催：11月12日	10.25 (火)	中日 (朝刊)
43 日本尊厳死協会東海支部講演会「胃ろうの功罪」開催：11月3日 葛谷雅文医学系研究科教授が講演	10.25 (火)	中日 (朝刊)
44 赤崎 勇本学特別教授が文化勲章を受章	10.25 (火)	日経 (夕刊)
	10.26 (水)	他3社 読売 他5社
45 現代日本誤百科 (515) : 「意図表示」町田 健文学研究科教授	10.26 (水)	中日 (朝刊)
46 「Viva 地球フォーラム2011」での杉山範子環境学研究所博士研究員の発言が紹介される	10.26 (水)	中日 (朝刊)
47 あいちサイエンスコミュニケーション・サマースクール2011「サイエンスイラストレーション入門」受講生作品展 開催：20日～11月11日 博物館野外観察園展示室	10.26 (水)	中日 (朝刊)
48 森 大輔さん本学学生はインターネットを使った学生放送局「ナゴヤタワーチャンネル」の代表を務め、木村めぐみさん本学大学院生が1回目の放送を担当する	10.26 (水)	中日 (朝刊)
	10.30 (日)	他2社 中日 (朝刊) 読売
49 小林 誠本学特別教授、益川敏英同特別教授が2008年にノーベル物理学賞を受賞したことを記念するリンゴの木の植樹式が行われた	10.27 (木)	中日 (朝刊)
50 現代日本誤百科 (516) : 「伝説を作る」町田 健文学研究科教授	10.27 (木)	中日 (朝刊)
51 第3回エコ大学ランキングで本学が総合1位となる	10.27 (木)	中日 (朝刊)
	11. 4 (金)	読売 朝日 (朝刊) 他2社
52 本学など28団体が参加する豊田市低炭素社会システム実証推進協議会は豊田市で「スマートハウス」の実証実験を本格的に始めた	10.27 (木)	日経 (朝刊)
53 教育学部附属中学・高校が認定校となっている「ユネスコスクール」の認定校を増やすため、愛知県が補助金を検討	10.27 (木)	中日 (朝刊)
54 国際言語文化研究科の学生が実行委員会を作って運営する「円頓寺映画祭2011」が開催される	10.27 (木)	朝日 (朝刊)
	11.11 (金)	毎日 (朝刊)
55 濱口総長は高校生へ贈る一冊として、「ローマ人の物語」を挙げる	10.27 (木)	朝日 (朝刊)
56 故坂田昌一博士の生誕百年記念石碑除幕式が開かれ、小林 誠本学特別教授、益川敏英同特別教授が出席する	10.28 (金)	読売 他2社
57 シンポジウム「濃尾地震から120年ーその教訓を振り返るー」開催：28日	10.28 (金)	読売
	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
	10.30 (日)	読売 中日 (朝刊)
58 名大カフェ Science, and Me 第16回「音のサイエンス」開催：11月2日 武田一哉情報科学研究科教授が講演	10.28 (金)	読売 毎日 (朝刊)
59 博物館特別講演会「目で見る生命現象：最新の電顕技術が解き明かすミクロ（細胞）の世界」開催：11月5日 臼倉治郎エコトピア科学研究所教授が講演	10.28 (金)	中日 (朝刊)
60 本学の「遺伝子組み換え鶏技術により生産する貧血治療薬」が科学技術振興機構の委託開発に採択される	10.28 (金)	日刊工業
61 東海圏4大学連携市民フォーラム「大学と地域が育てるグローバル・リーダー」開催：11月5日 濱口総長が出席	10.29 (土)	中日 (朝刊)
	11. 4 (金)	
62 講演会「津波でんでんこ」開催：11月5日 川崎浩司工学研究科准教授が東日本大震災の津波被害と東海地方への影響を解説	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
	11. 6 (日)	
63 名古屋大学鶴舞公開講座「体質とは何だろう？薬効や生活習慣病との係わり合い」開催：11月19日	10.29 (土)	朝日 (朝刊)
64 山田崇恭工学研究科助教は第27回（2011年度）マツダ研究財団助成対象に選ばれる	10.29 (土)	中日 (朝刊)
65 藤井輝明氏本学卒業生が絵本を出版する	10.29 (土)	中日 (朝刊)
66 ジュニア向け ニュースのおさらい：本学などが観測した「超光速」ニュートリノが取り上げられる	10.29 (土)	朝日 (夕刊)
67 本学で29日より日本災害情報学会の第13回学会大会が始まる	10.30 (日)	中日 (朝刊)
68 第70回日本癌学会学術総会での高橋 隆医学系研究科教授の発言が紹介される	10.30 (日)	読売

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年10月16日～11月15日]

記事	年月日	新聞等名
69 小島勢二医学系研究科教授が座長をつとめた日本血液学会公開シンポジウムの抄録が掲載される	10.30 (日)	朝日 (朝刊)
70 杉山 直理学研究科教授は「暗黒エネルギーの増え方が予想と違えば、まったく新しい理論を考えないといけない」と話す	10.31 (月)	朝日 (朝刊)
71 山下博美環境学研究科 COE 特任准教授は COP10開催から 1 年となる記念シンポジウムで「干潟は安く土地を確保するため半分以上が埋め立てられたが、高潮の緩衝地帯でもあった」と話す	10.31 (月)	中日 (朝刊)
72 公開講座「C 型肝炎は治せる時代へ」開催：30日 片野義明医学部附属病院講師が講演	10.31 (月)	中日 (朝刊)
73 東海学生アメリカンフットボール：本学、中京大学、名城大学が優勝し、抽選の結果、中京大学が全日本大学選手権初出場	10.31 (月) 11. 4 (金)	朝日 (朝刊)
74 現代日本誤百科 (517)：皆さん「よくよく目にしている」町田 健文学研究科教授	10.31 (月)	中日 (朝刊)
75 下村 脩本学特別教授の母校の長崎県立諫早高校に昨年設置された銅像が紹介される	11. 1 (火)	朝日 (朝刊)
76 現代日本誤百科 (518)：「優勝争いを引っ張る」町田 健文学研究科教授	11. 1 (火)	中日 (朝刊)
77 医学部附属病院で医療安全文化の向上を訴える講演会が開催される	11. 1 (火)	中日 (朝刊)
78 医学部附属病院は脳外科手術に高精度ロボットをアジアで初めて導入し、12月初旬に手術を行う予定	11. 1 (火)	中日 (朝刊)
79 研究現場発：新しい植物由来ポリマーを作る 上垣外正己工学研究科教授	11. 1 (火)	中部経済新聞 (朝刊)
80 本学から文部科学省「大学の世界展開力強化事業」に 3 件採択される	11. 2 (水)	日経 (朝刊) 朝日 (朝刊)
81 現代日本誤百科 (519)：「爽快人間」町田 健文学研究科教授	11. 2 (水)	中日 (朝刊)
82 中日くらし友の会公開講演会「正しく美しい日本語」開催：8日 町田 健文学研究科教授が講演	11. 2 (水) 11. 9 (水)	中日 (朝刊)
83 ロボットシンポジウム2011名古屋開催：15日 山田陽滋工学研究科教授が講演	11. 2 (水)	中日 (朝刊)
84 訃報：森 昌弘本学名誉教授	11. 2 (水)	中日 (朝刊)
85 福井康雄理学研究科教授は「宇宙線」超新星起源説を立証する	11. 2 (水)	中日 (夕刊)
86 平成23年秋の叙勲：杉浦昌弘本学名誉教授が瑞宝重光章を受章、植下 協同名誉教授、島田静雄同名誉教授、伊藤憲昭同名誉教授、保原 充同名誉教授、沖 猛雄同名誉教授が瑞宝中綬章を受章、鈴木三栄子元医学部附属病院看護部副看護部長、島立清志元財務部経理・資産管理課調理師が瑞宝単光章を受章	11. 3 (木)	中日 (朝刊) 日経 (朝刊)
87 現代日本誤百科 (520)：試合中に「インターバルがあく」町田 健文学研究科教授	11. 3 (木)	中日 (朝刊)
88 石原一彰工学研究科教授 特定の反応を選択できる触媒を開発	11. 3 (木)	日刊工業
89 加藤博和环境学研究科准教授は「高速ツアーバスは道路運送法の趣旨に反するので新制度への移行が望ましい」と語る	11. 3 (木)	朝日 (朝刊)
90 小堀 聡経済学研究科准教授が第54回日経・経済図書文化賞を受賞	11. 3 (木)	日経 (朝刊)
91 本学漕艇部100周年記念式典開催：12日	11. 3 (木) 11. 4 (金) 11.15 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊) 中日 (朝刊)
92 本学ですでに導入されている「テーブル・フォー・ツー運動」をトヨタ紡織がスタートする	11. 3 (木)	読売
93 日本学校保健学会市民公開フォーラム「こころとからだの豊かな発達をめざして」開催：13日	11. 3 (木)	中日 (朝刊)
94 「高齢者の筋肉の衰えをいかに防止するか」を考える国際シンポジウム「アミノ酸栄養とサルコペニア」開催：4日	11. 3 (木)	中日 (朝刊)
95 慢性腎臓病市民公開講座「大切にしていますか？あなたの腎臓」開催：19日 安田宜成医学系研究科寄附講座准教授が講演	11. 3 (木)	中日 (朝刊)
96 赤崎 勇本学特別教授は皇居にて行われた文化勲章授与式に出席した	11. 4 (金)	中日 (朝刊) 他 3 社
97 水谷法美工学研究科教授は東海地区の津波対策として「ハード、ソフト両面の充実が求められる」と語る	11. 4 (金)	毎日 (朝刊)
98 生命農学研究科と研究協力協定を結ぶ愛知県農業総合試験場が公開される	11. 4 (金)	中日 (朝刊) 読売
99 ウズベキスタン出身の本学留学生が、「さまざまな国の人が一緒になってウォーキングと各国の料理を楽しむ集い」において、祖国の料理「プロフ」を作る	11. 4 (金)	読売
100 本学などの研究チームは東日本大震災の直後、大気中の波の観測に成功する	11. 4 (金)	毎日 (夕刊)
101 野依良治本学特別教授らが発起人の「桃・柿育英会 東日本大震災遺児育英資金」への寄付の申し出が約30億円に達する	11. 5 (土)	朝日 (朝刊)
102 沢田昭二本学名誉教授が内部被ばくに関して「3 ミリシーベルトという数字だけで安心と判断するのは早計だ」と指摘する	11. 5 (土)	日経 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
103 森川高行環境学研究科教授は東名高速「豊田-音羽蒲郡」3車線化について、「渋滞時のみ3車線にする運用を考えた方がいい」と話す	11. 5 (土)	中日 (夕刊)
104 第7回高等研究院レクチャー開催：9日 益川敏英本学特別教授が講演	11. 6 (日)	中日 (朝刊)
105 東海圏4大学連携市民フォーラムが開かれ、濱口総長は「国際化」を重視していると述べる	11. 6 (日)	日経 (朝刊)
106 病院の実力：愛知編「B型肝炎」で医学部附属病院の実績が紹介される	11. 6 (日)	読売
107 環境学研究科創設10周年記念講演会開催：19日	11. 6 (日)	中日 (朝刊)
108 「若者の性の問題に対するより効果的な連携に向けて-女性への性暴力を防ぐ-」講演会開催：13日	11. 6 (日)	中日 (朝刊)
109 現代日本誤百科 (521)：後輩の成長を満喫する 町田 健文学研究科教授	11. 7 (月)	中日 (朝刊)
110 ここが聞きたい：「COP17の焦点」高村ゆかり環境学研究科教授	11. 7 (月)	読売
111 本学を含め国立大の4割が震災ボランティアを単位として認定していることが判明	11. 7 (月)	毎日 (朝刊)
112 全日本大学駅伝：本学学生4名が東海学連選抜としてオープン参加	11. 7 (月)	朝日 (朝刊)
113 瀧口義浩氏本学卒業生が放射線を瞬時に連続して測定することが可能な装置を開発	11. 7 (月)	朝日 (朝刊)
114 名古屋の空から：東山キャンパス「第一グリーンベルト」	11. 7 (月)	中日 (朝刊)
115 日本科学技術ジャーナリスト会議シンポジウム「原発報道を振り返る」開催：6日	11. 7 (月)	中日 (朝刊)
116 現代日本誤百科 (522)：わしへの「裏切りはご法度」だ 町田 健文学研究科教授	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
117 大野欽司医学系研究科教授は重症筋無力症の一因である抗体の働きを解明	11. 8 (火)	日刊工業
118 中部地方整備局が「五連動地震」を想定したことに対し福和伸夫環境学研究科教授は「最悪の場合を考えた取り組み」と評価し、川崎浩司工学研究科准教授は「五連動ならば、シミュレーションより津波被害は大きくなるかもしれない」と語る	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
119 研究室発：「光るミミズ、おもしろいでしょ」大場裕一生命農学研究科助教	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
120 「東海地域の水土保全と防災シンポジウム-東海・東南海等の大地震から水・土・里を守るために-」開催：15日 生源寺真一生命農学研究科教授が講演	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
121 防災・日本再生シンポジウム「東海3県の国立大学が社会に向けて提案する巨大地震対策」開催：20日 福和伸夫環境学研究科教授らが意見を交わす	11. 8 (火)	中日 (朝刊)
122 現代日本誤百科 (523)：「せき止め湖」町田 健文学研究科教授	11. 9 (水)	中日 (朝刊)
123 荒川直親医学系研究科教授は「インフルエンザウイルスとMRSAとの重複感染が重症化を起こすことは十分考えられる」と話す	11. 9 (水)	朝日 (朝刊)
124 山田基成経済学研究科准教授はトヨタ自動車の生産戦略の見直しについて「最低限の安全在庫は持たざるをえず、在庫の確保でトヨタ生産方式の本来の目的にかなうだろう」と語る	11. 9 (水)	朝日 (朝刊)
125 「大学ブランド・イメージ調査2011-2012 (北陸・東海)」で本学が1位となる	11. 9 (水)	日経 (朝刊)
126 博物館「進化にふれるハンズオン・ギャラリー」開催：12月17日	11. 8 (火)	中日 (夕刊)
127 メッセナゴヤ2011開催：9～12日 本学が出展	11. 9 (水)	中日 (朝刊)
128 本学と理化学研究所の研究グループはマウスでES細胞から下垂体を作ることに成功	11.10 (木)	日経 (朝刊)
	11.11 (金)	他4社 読売
129 本学は大同大学ほかと共同して小型人工衛星を開発し、早ければ来冬にも打ち上げると発表	11.10 (木)	中日 (朝刊)
		他3社
130 町田泰則理学研究科教授らのグループは植物の細胞分裂を酵素が抑制していることを発見	11.10 (木)	中日 (朝刊)
131 現代日本誤百科 (524)：「何でもあり」町田 健文学研究科教授	11.10 (木)	中日 (朝刊)
132 後藤百万医学系研究科教授は排せつケアについて「現状は施設も住宅もひどい状況が多い」と指摘する	11.10 (木)	中日 (朝刊)
133 人と自然の共生国際フォーラム「持続可能な社会を目指して、理念から行動へ、今変わる時」開催：10月15日 高野雅夫環境学研究科准教授がファシリテーターを務める	11.10 (木)	中日 (朝刊)
134 書籍：「平和をつむぐ-平和憲法を守る9人の手記」森 英樹本学名誉教授が手記を寄せる	11.10 (木)	中日 (夕刊)
135 訃報：河鱈公昭本学名誉教授	11.10 (木)	中日 (夕刊)
		朝日 (朝刊)
136 防災減災：福和伸夫環境学研究科教授は地盤の把握と「共振」対策の重要性について解説する	11.11 (金)	読売 (朝刊)
137 和田 肇法学研究科教授は労働者派遣法について「専門的な知識や技術を生かし希望する働き方を選べるという本来の性格に戻していくべき」と語る	11.11 (金)	中日 (朝刊)
138 小林 誠本学特別教授が理事を務める仁科記念財団の「仁科記念賞」の2011年度受賞者が決定する	11.11 (金)	中日 (朝刊)
		他2社
139 松尾副総長が「世界糖尿病デー」を前に治療の現状や予防策について話す	11.13 (日)	読売 (朝刊)

本学関係の新聞記事掲載一覧 [平成23年10月16日～11月15日]

記事	月日	新聞等名
140 春名幹男国際言語文化研究科特任教授は TPP 問題について「国民は政府に主張すべきところではしっかりと意見を出していくべきだろう」と話す	11.12 (土)	中日 (朝刊)
141 講演会「東日本大震災から岐阜県の地震災害を考える」：山岡耕春環境学研究科教授が講演	11.12 (土)	中日 (朝刊)
142 林 良嗣環境学研究科教授が12月14日に開催される中部経済連合会主催「中部の未来を考える会」でコーディネータを務める	11.12 (土)	中日 (朝刊)
143 大学卒業アルバムの購入者が減少し、本学生協は「現在の制作部数は4年生の半数程度の1300部」と話す	11.12 (土)	毎日 (夕刊)
144 渡邊 剛氏本学卒業生が中日ドラゴンズが日本一となった場合の経済効果について話す	11.12 (土)	日経 (夕刊)
145 安成哲三地球水循環研究センター教授らは福島第一原子力発電所の事故で放出された放射性物質の全国分布を推定した地図を作成	11.15 (火)	朝日 (朝刊) 他4社
146 豊國伸哉医学系研究科教授らは極小の炭素素材カーボンナノチューブの形状と発がん性との関連を解明	11.15 (火)	朝日 (朝刊) 他2社
147 野依良治本学特別教授は、スパコン「京」が世界首位を守ったことについて「今後の科学技術振興や産業競争力の強化につながる大きな一歩と確信している」と話す	11.15 (火)	中日 (朝刊) 朝日 (朝刊)
148 現代日本誤百科 (525)：「捨てるのは忍びない」町田 健文学研究科教授	11.15 (火)	中日 (朝刊)
149 ノーベル賞受賞者を囲むフォーラム「次世代へのメッセージ」開催：12月16日 野依良治本学特別教授が講演	11.15 (火)	読売 (朝刊)
150 大井貴史工学研究科教授が「有機イオン対精密触媒による不斉合成法の研究」で日本 IBM 賞を受賞	11.15 (火)	日刊工業
151 フロンティア21エレクトロニクスショー2011：15日、16日 福和伸夫環境学研究科教授が講演	11.15 (火)	日刊工業
152 第17回名古屋メダルセミナー開催：14日	11.15 (火)	中日 (朝刊)
153 人工内耳説明会開催：20日 曾根三千彦医学系研究科准教授が講演	11.15 (火)	中日 (朝刊)
154 訃報：福田茂男本学名誉教授	11.15 (火)	中日 (朝刊)
155 医人伝：吉崎さやか氏本学卒業生のチャイルド・ライフ・スペシャリストとしての仕事が紹介される	11.15 (火)	中日 (朝刊)
156 本学は大学院創薬科学研究科を新設することを発表	11.15 (火)	中日 (夕刊)

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月5日(月)～1月31日(火)

場 所：野外観察園セミナーハウス
2階展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：土・日・祝日および12/29～1/3

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

サテライト展示「野外観察園の四季」

12月6日(火)～2月29日(水)

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日および12/29～1/3

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

企画展「奈良坂源一郎『蟲魚圖譜』

ー解剖学創始者のミュージアムー

[特別講演会]

1月31日(火)

場 所：博物館講義室

時 間：13:30～16:00

講演題目：「医学とチョウ」、「奈良坂と愛知教育博物館」

講 演 者：高橋 昭 (本学名誉教授)、加藤詔士氏 (愛知大学教授)

参 加 費：無料

[ギャラリートーク]

12月24日(土)

場 所：博物館展示室

時 間：13:30～14:30

講 演 者：島岡 真氏 (本学博物館研究協力者)

参 加 費：無料



12月6日(火)～2月29日(水)

場 所：博物館展示室

時 間：10:00～16:00

休 館 日：日・月曜日および12/29～1/3

入 場 料：無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

現代の博物画ーボタニカルアート作品展

12月16日(金)

場 所：医学部附属病院中央診療棟3階
講堂

時 間：14:00～18:00

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

医学部・医学系研究科
事務部経営企画課研究協力掛
052-744-2429

第4回医学・バイオ系知財フェア

講演題目：「治験を取り巻く環境変化について」

講 演 者：稲津水穂氏

(ノバルティスファーマ株式会社執行役員開発本部副部長)

講演題目：「異業種から医療機器参入のポイント」

講 演 者：日吉和彦氏

(財団法人医療機器センター医療機器産業研究所上級研究員)

講演題目：「脳卒中外科における産学官連携によるデバイスの開発」

講 演 者：宮地 茂 (医学系研究科准教授)



12月16日(金)

場 所：ベンチャー・ビジネス・ラボラトリー
4階ミーティングルーム

時 間：15:30～17:30

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

研究推進室 052-747-6410

第4回グリーンエネルギーシステム実証研究会

講演題目：「熱電変換材料の現状と課題」

講 演 者：竹内恒博 (エコトピア科学研究所准教授)

講演題目：「風力エネルギー利用における技術課題」

講 演 者：長谷川 豊氏 (名古屋工業大学教授)

イベントカレンダー

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

12月16日(金)~12月21日(水)

場 所: 理学南館坂田平田ホール

内 容: ワークショップ (12/16~18)、
スクール (12/19~21)

参加費: 無料

[問い合わせ先]

GCOE 事務室 052-789-2930

グローバル COE プログラム「宇宙基礎原理の探求」

2011 International Winter School / Workshop "Particle Cosmology"

12月17日(土)

場 所: 博物館展示室

時 間: 11:00~12:10

対 象: 一般

参加費: 無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

博物館コンサート「ジャズでつづるクリスマス」

演奏曲目: 「ホワイトクリスマス」、「清しこの夜」、

「Fly Me To The Moon」、「A 列車で行こう」他

出 演: 長谷川智則氏 (サクソ)、牧野伸太郎氏 (ベース)、
松永有希子氏 (ピアノ)、加藤広祐氏 (ドラム) 他



12月17日(土)

場 所: 博物館講義室

時 間: 第1回13:00~、第2回15:00~

定 員: 各回30名

対 象: 小学生以上

(小学生は保護者同伴)

参加費: 無料

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

進化にふれるハンズオン・ギャラリー

テ ー マ: 「進化と学術標本」

内 容: テーマに関する解説・標本体験コーナー



12月17日(土)、1月14日(土)

場 所: インキュベーション施設1階
プレゼンテーションルーム

時 間: 10:00~15:00

対 象: 一般

参加費: 無料

[問い合わせ先]

社会貢献人材育成本部

ビジネス人材育成センター 052-747-6490

ビジネス人材育成センター

平成23年度後期 B 人セミナー

テ ー マ: 「グローバルスタンダードで使われる伝達スキル」、

「ビジネスマナーの基本とその応用」(12/17)

「医薬品・医療機器産業の近未来」、

「プレゼンテーションスキル研修」(1/14)

12月23日(金)

場 所: 博物館実験室

時 間: 13:00~16:00

定 員: 20名

対 象: 小学5年生以上、一般

参加費: 50円 (保険料)

[問い合わせ先]

博物館事務室 052-789-5767

ミクロの探検隊

テ ー マ: 「ミクロの世界をのぞいて放散虫の進化に触れよう！」

電子顕微鏡のふしぎ



12月27日(火)

場 所: ES 総合館ラウンジ他

時 間: 12:00~17:30

対 象: 高校生、大学生

参加費: 800円

[問い合わせ先]

高等研究院 052-788-6153

第3回アカデミーサロン

ノーベル物理学賞 益川敏英特別教授が贈る

特別記念講座

内 容: 益川教授とのランチョンフォーラム、実験室見学

講演題目: 「CP 対称性とは?」

講 演 者: 益川敏英 (本学特別教授)

講演題目: 「対称性と素粒子」

講 演 者: 青木保道 (基礎理論研究センター准教授)



開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

1月7日(土)

場 所：シンポジオンホール
時 間：13:00～
対 象：一般
参 加 費：無料

地球水循環研究センター公開講演会

テ ー マ：「宇宙から海を観る・測る」
講演題目：「海と大気の相互作用を測る」
講 演 者：江淵直人氏（北海道大学教授）
講演題目：「海流を測る」
講 演 者：森本昭彦（地球水循環研究センター准教授）
講演題目：「プランクトンを観る」
講 演 者：石坂丞二（地球水循環研究センター教授）
講演題目：「魚を観る」
講 演 者：斎藤誠一氏（北海道大学教授）

[問い合わせ先]
地球水循環研究センター
研究協力事務室 052-789-3459

1月12日(木)

場 所：豊田講堂
時 間：13:30～15:00
対 象：一般
参 加 費：無料

名古屋大学豊田講堂「登録有形文化財」への登録 および「BELCA 賞受賞」記念式典

講演題目：「西方への旅とその半世紀後」
講 演 者：榎 文彦氏（株式会社榎総合計画事務所代表取締役）

[問い合わせ先]
施設管理部施設企画課 052-789-2115



1月13日(金)

場 所：シンポジオンホール
時 間：15:00～18:00
定 員：200名（先着順）
対 象：一般
参 加 費：無料

平成23年度 脳とこころの研究センター オープンシンポジウム

テ ー マ：「一脳研究：どこまで見えたか、わかったか—今治せること、これから治せること」
講演題目：「脳は不思議がいっぱい！痛みと痒みの脳内認知機構はどうなっているのか」
講 演 者：柿木隆介氏（自然科学研究機構生理学研究所教授）
講演題目：「車の運転と脳—薬や加齢は脳を介して運転技能にどのような影響を与えるか—」
講 演 者：尾崎紀夫（医学系研究科教授）
講演題目：「認知症：どう予防し、どう治すのか」
講 演 者：祖父江 元（医学系研究科長）
講演題目：「薬は脳のどこに効くのか」
講 演 者：須原哲也氏（放射線医学総合研究所分子イメージング研究センター
分子神経イメージング研究グループリーダー）

[問い合わせ先]
医学部・医学系研究科
事務部総務課 052-744-2804

1月18日(水)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：10:00～17:30
参 加 費：無料

文部科学省先端研究施設共用促進事業連携シンポジウム —復興と新生のための科学技術支援と産学官連携促進—

テ ー マ：「我が国の復興・新生に向けた科学技術支援と産学連携促進」
内 容：6大学（名古屋大学、京都大学、大阪大学、東京理科大学、東北大学、
名古屋工業大学）による成果報告、講演、展示ブース
講演題目：「共用促進事業の現状と将来について（仮題）」
講 演 者：柿田恭良氏（文部科学省研究振興局基盤研究課長）
講演題目：「震災からの復興に向けて—長期展望に立った東北地区の問題と産学連携」
講 演 者：庄子哲雄氏（東北大学卓越教授）

[問い合わせ先]
超高圧電子顕微鏡施設
事務局 052-789-3632

1月19日(木)～1月20日(金)

場 所：野依記念学術交流館
時 間：10:00～18:00
参 加 費：無料

文部科学省先端研究施設共用促進事業国際シンポジウム 産業界における電子顕微鏡の役割—真の産学協同に向けて—

内 容：講演、ディスカッション、ポスターセッション

[問い合わせ先]
超高圧電子顕微鏡施設
事務局 052-789-3632

開催月日・場所・問い合わせ先等

内容

2月5日(日)

場 所：医学部附属病院中央診療棟 3階
講堂

時 間：14:00～16:00

定 員：200名

対 象：一般

参 加 費：無料

[問い合わせ先]

医学部・医学系研究科

事務部学務課 052-744-1981

東海がんプロフェッショナル養成プラン

医学部附属病院 平成23年度市民公開講座

テ ー マ：「ここまで進んだがん治療」

講演題目：「名古屋大学のがんプロフェッショナル」

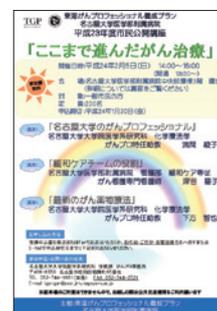
講 演 者：満間綾子（医学系研究科特任助教）

講演題目：「緩和ケアチームの役割」

講 演 者：深谷陽子（医学部附属病院看護師）

講演題目：「最新のがん薬物療法」

講 演 者：下方智也（医学系研究科特任助教）



3月4日(日)

場 所：医学部保健学科東館 4階大講義室

時 間：13:30～16:30

参 加 費：2,000円（全4回）

[問い合わせ先]

医学部保健学科 GP 事務室 052-719-3158

平成23年度

がんを生き抜くライフトピアスクール

内 容：「明るく病氣と向き合う」、「修了式」

名大トピックス No.223 平成23年12月15日発行

編集・発行／名古屋大学広報室

本誌に関するご意見、ご要望、記事の掲載などは広報室にお寄せください。

名古屋市千種区不老町（〒464-8601）

TEL 052-789-2016 FAX 052-788-6272 E-mail kouho@post.jimu.nagoya-u.ac.jp

表紙

中央図書館
（平成23年11月18日）



名大トピックスのバックナンバーは、名古屋大学のホームページ
（<http://www.nagoya-u.ac.jp/extra/topics/>）でもご覧いただけます。

116 第10代総長 ^{かとうのぶお}加藤延夫 — 名大をひきいた人びと⑮ —

第10代総長の加藤延夫は、1930(昭和5)年、名古屋市に生まれました。45年に陸軍航空士官学校を受験しますが、その入学直前に敗戦をむかえました。その後、名大教養部の前身にあたる第八高等学校をへて、54年に名大医学部を卒業します。旧制最後の卒業生でした。

卒業後、大学院に残って研究を続け、1959年に医学部助手となり、63年には講師となりました。愛知学院大学歯学部微生物講座助教授に就任したのち、67年から68年にかけてフンボルト財団奨学生として西ドイツのギーセン大学で研究しました。母校から細菌学講座担当の要請をうけて帰国しますが、当時の名大医学部は大学紛争のただなかで混乱しており、正式に助教授に任命されるまで実に2年を要したといえます。

医学部の紛争からの正常化のために積極的に発言・行動していた加藤は、1976年に46歳で医学部長に選任されました。その後、通算で3期6年務め、鶴舞・大幸地区の組織

と施設の充実などを実現しました。そして92(平成4)年4月、総長に就任したのです。

6年間の主な事績としては、1991年の大学設置基準の改訂を背景とする、教養部廃止(93年)と4年一貫教育体制への完全移行(94年)や、理学部(96年)と工学部(97年)の大学院重点化などが挙げられます。また、独立大学院として人間情報学研究科(92年)と多元数理科学研究科(95年)、医療技術短期大学部を発展させた医学部保健学科(97年)の創設なども特筆されます。

施設面では、深刻になっていた狭隘化・老朽化を解決するため、1993年を「名古屋大学施設再開発元年」とすると宣言し、実際にその後、各キャンパスの施設整備がめざましく進みました。

大学をめぐる新しい動きを的確に伝達し、構成員の意思疎通をはかることを目的として、1993年に本誌『名大トピックス』が創刊されたのも加藤総長の時代です。



4	1	3
2	5	



- 1 加藤延夫第10代総長(1930-)。『名古屋大学五十年史』の編さんにも熱心に取り組み、1990年から92年にかけては名古屋大学史編集委員会委員長を務めた。総長退任後は、愛知芸術文化センター総長、愛知医科大学学長・理事長を歴任した。
- 2 4年一貫教育の開始を表紙と巻頭に掲げた『名大トピックス』(1994年7月号)
- 3 1996年に竣工した医学部附属病院病棟。この時は中央部と西病棟のみの竣工であり、東病棟が完成して現在のようになったのは1999年である。そのほか、工学部1号館、国際開発研究科棟、ベンチャービジネスラボラトリー、人間情報学研究科(現在は情報科学研究科)棟、理1号館(多元数理科学研究科棟)なども、加藤総長在任中に竣工した建物である。
- 4 医学部保健学科のプレートを上掲する加藤総長(1997年10月)。
- 5 名大中央図書館の2階と3階の間の壁に掲げられた加藤延夫総長の揮毫。「驕りて亡びざる者未だ之(これ)有らざるなり」と読み、『春秋左氏伝』(孔子の著とされる歴史書『春秋』の注釈書)を出典としている。